



弓状の鞆の浦

土木遺産の香 第90回

人が行き交う港「鞆の浦」 広島県福山市



八千代エンジニアリング株式会社／管理統括本部／総務部厚生課
本田 悠稀実／HONDA Yukimi
(会誌編集専門委員)

港としての始まり

広島県福山市鞆の瀬戸内海に突き出た沼隈半島南端に位置する鞆の浦は、背後に急峻な山々が海岸まで迫り、わずかな平地に家々が軒を連ねて立ち並んでいる。南に開いた半円(弓)状の鞆の浦は、東に仙酔島、弁天島、大可島を配し、西に明神岬、南に玉津島で守られた多島海の天然の良港であり、瀬戸内で最も栄えた港の一つとされている。鞆の浦の港湾施設は雁木、波止、常夜燈、焚場、船番所石垣などの石造物がほぼ完存している。

鞆の浦がいつから港として存在しているかは不明とされているが、文献に初めて登場したのは『万葉集』であった。730(天平2)年に大宰府の長官であった大伴旅人が鞆の浦に生える直立の常緑低木の杜松の木について歌い、736(天平8)年には遣新羅使も杜松の木について歌っている。万葉集では杜松の

木がむろの木という名になっている。歌われていると実物を見てみたくなるものだが、1718(享保3)年に阿弥陀寺が作成した観光マップによると、「磯ノムロノ木今ハ無」との記載があり、この頃にはすでに杜松の木は消滅していたことが分かる。

古来より瀬戸内の海上交通の要衝であった鞆の浦には、幾多の人々が行き来をした。このころから鞆の浦は港としての役割を果たしていたと思われる。奈良時代には都と九州大宰府の往来や朝鮮通信使、さらには遣唐使が寄港する港として栄え、深津・糸崎・風早・倉橋島とならんで、当時の航路の拠点であった。また、軍記物語の『長門本平家物語』には、鞆の浦で兵船を整えたという記述もあり、平安時代には、平家によって開かれた日宋貿易の重要な中継港として栄えた。鎌倉時代になると、いよいよ多くの船が出入りするようになり、さらに室町時代には

勘合貿易の基地として一層栄えるようになった。

なぜ、鞆の浦は海上交通の要衝として瀬戸内で栄えたのだろうか。

潮待ちの港

鞆の浦が栄えた大きな要因は瀬戸内海の中央部に位置し、往時、潮流の変化を待って航海をしなければならない「潮待ち」に最も適していたことである。潮待ちとは、船が潮流に乗って寄港して、荷物を積み下ろし、そして次の潮流を待って、その潮流に乗って出ていくことをさす。潮が高い満潮時には、瀬戸内海の東西から流れ込んだ潮は、この鞆の沖合でぶつかり合い、やがて引き潮が始まり、また東西に分かれて引き始める。瀬戸内海では通常1日に2回の干満があり、ほぼ6時間ごとに潮流が逆転するため、船にエンジンがない時代には潮の流れを上手に使った航海が必要であった。

風と潮に大きく依存する古代の航法では、瀬戸内海の真ん中に位置する鞆の浦で、潮待ちのため停泊しなければならなかった。

天然の良港にはいくつかの地理的条件がある。まず、一定の水深があることだが、それには、砂浜海岸ではなく山の迫る急崖の海岸線が必要である。近くに河口があると川の運ぶ土砂で浅くなるため不向きだし、一方で適当な平地もなければならない。また、湾や島影といった荒天時に船が波風を避けられる地形が必要で、最適なことは入り江になっていることだ。鞆の浦はこの条件にぴったり当てはまるだけでなく、瀬戸内海の潮目の海域に突き出した半島の先端に位置している。まさに鞆の浦は、偶然の産物としかいいようのないほどの「潮待ちの港」にふさわしい立地条件を持った港だった。このため、鞆は古くから軍事的、政治的、さらには、経済的な要衝として、重要な位置を占めていた。

港湾施設の誕生

中世にも鞆は朝鮮半島・中国への貿易船や勘合船の寄泊所として栄えたが、江戸時代の北前船の時代になって大いに栄えるようになった。17世紀後

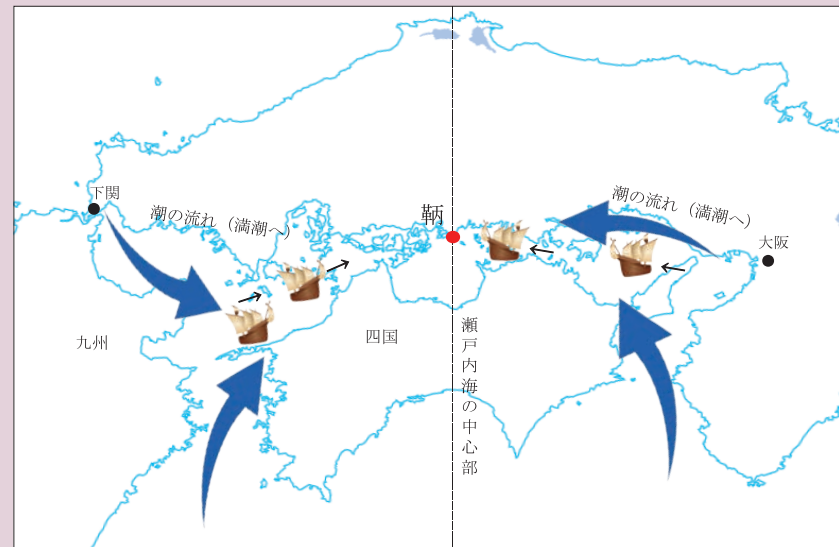


図1 潮待ちのイメージ図

半になると帆走能力が飛躍的に向上して弁財船と呼ばれる新しいタイプの廻船が生まれた。これにより潮流の穏やかな沖合を多少の逆流でも風さえよければ航行することが可能になり、瀬戸内海を直行する航路は陸地を目印として航行する「地乗り」から、星などを頼りに航行する「沖乗り」に転換していく。

文化・文政の頃になると、荷物を運んで運賃を取る運賃積みから、船頭自らの裁量で積荷を仕入れたたり売却したりする買い積みへの転換が行われる。そうして北前船や九州船が次々と寄港し、鞆の浦は商港として重要な位置を占めるようになった。

明神岬、大可島、玉津島などが防波堤となり、もともと天然の良港ではあったが、大型船の出入りが多くなると、それに伴い港の整備が必要となり港湾施設が造られた。



写真1 干潮時の雁木



写真2 長く伸びる波止



写真3 港を見守る常夜燈



写真4 焚場の地名が残る地区



写真5 形を変えて残る船番所石垣

①雁木

半円状の鞆港内全長にわたり、連続的に巡らせている。船着場である雁木は3箇所に分かれ、常夜燈のある長さ42m高さ3.5mの大雁木、大雁木～船番所間の半分を占める長さ112m高さ2.4～3.2mの北東雁木、船番所そばの長さ11m高さ3.5mの波止雁木がある。石造で階段状にして随時接岸可能とした伝統的な雁木である。切石の延石を並べ、長大な石段を形成し、一部は江戸後期、その他は明治時代の修築である。雁木の材料は瀬戸内海沿岸で産出される花崗岩の切石であり、鞆の浦近傍や周辺の阿伏鬼および仙酔島の石が利用されたといわれる。干満差の大きい瀬戸内海の港であるため段数も多い。雁木最上段付近に船繋石が付く。

雁木は、福島正則の時代に大可島を陸続きにした時に作られたという記録がある。今も目にすることができ雁木は、文化年間（1804～1818年）の築造で、常夜燈と一体になって近世の港の風情をよく残している。

②波止

天然の良港も台風などの強風には勝てず、船を守るために波止（防波堤）が造られた。まず、1791（寛政3）年に藩が備前国児島郡の栄五郎に発注して大可島から約90m、淀姫神社下から約36mの波止が完成した。しかし、20年もすると破損し始めたため、1810（文化7）年から1824（文政7）年にかけて、鞆奉行と商人たちの協力により、波止の延長と修理が行われた。その後、1847（弘化4）年には玉津島の波止が豊後国の柴田宗衛門によって築造され、ほぼ今日の鞆港の姿となった。

鞆港南東の港外寄り端部から海に向かって途中で折れ曲がって突き出す、港を守る伝統的な防波堤である。江戸時代に描かれた町絵図に波止が窺え、当時の特色をよく残していることが分かる。明治十年代には折れ曲がって突き出した現在と同型の石積の波止の図が描かれている。現在のものは明治中期の改築と推定され、港の内側には所々に急な雁木を設け、船着場も兼ねている。波止のうち港内寄りには内側を一段低くし、さらに利用しやすくしている。

③常夜燈

常夜燈は、港のどこからも見える位置にあり、鞆港のもっとも古い航路の目印で海上安全を祈って1816（文化13）年に富豪大坂屋が寄進したが、暴風雨で崩壊し、現在の常夜燈は1859（安政6）年に西の人々の寄進により再建された。

雁木の先端で海中から立ち上がる、港の入り口を示す伝統的な灯台である。近代以前の港湾の形式を残す鞆港を知るうえで重要な遺構であり、江戸時代の石造常夜燈としては全国最大級である

④焚場

焚場は、船底についた貝類やフナムシを除去するため船底を焼いて乾燥させることで船の寿命を延ばすための施設で、現在は海の中にあり姿を見ることができないが、現在も焚場という地名は残っている。1790（寛政2）年の『鞆津申渡並書上類控』によると、「これまでは近隣の良港として、船の出入りも多く繁栄していたが、最近はやその港も設備を整えてよくなり、このままでは鞆の港は衰退してしまうので、波止の構築をお願いしたい」という旨の願いが町方から藩へ出されている。これによって、翌年か

ら波止の構築と共にそれまで砂場を利用していた焚場の一部を石垣で補強する工事が始まった。その後、文化・文政の頃には大型船が年間約900隻も焚場に入っていたことが記録に残っている。

⑤船番所石垣

江戸中期から後期の築造で、波止近くの高台に築かれている。建物部分は大正年間（1912～1926年）に新築され、昭和30年頃に建て替えられている。現在はカフェが入っており、緑に覆われている。船番所の上手には、延宝年間（1673～1680年）に鐘楼が建ち、鞆の浦の住民に時を告げる鐘が打ち鳴らされていたという。石垣は、船の出入りを監視したかつての船番所のものであり、そこに至る石造の階段とともに現存している。大振りな石を用い、角を算木積とした切込接ぎ布積一部乱積としている。

そして現代へ

江戸時代を通して商港として発展してきた鞆の浦も、幕末になり軍事基地としての性格を強めた。黒船の来航もあり、維新前夜には毛利氏が七人の公卿と共に、京都から共に落ち延びてくるなど変動の時代を迎えた。維新後の鞆は、港としての数々の特権を失い、西洋型帆船や汽船の登場により潮待ちの港を必要としなくなったため、鞆の海運業や商業は衰退の一途をたどることになる。しかし鞆には、数百年来の刀鍛冶、海運の町としての船釘や錨などの船具加工といった伝統産業があった。それが大正期の製鋳、建築用材の伸鉄生産の急伸により、鉄工業の町としてひとときの隆盛を見ることになる。

現在の鞆の浦は、観光港として多くの観光客を迎え入れている。そして、かつて鞆の浦に寄港していた朝鮮通信使のごとく、300～500人程度を乗せた外国のクルーズ船が定期的に寄港している。港としてのあり方は変わっても、幾多の人々が行き来し続けるだろう。



図2 江戸末期に描かれた鞆の浦

<参考資料>

- 1) 福山市ホームページ <https://www.city.fukuyama.hiroshima.jp/soshiki/kanko/85750.html>
- 2) まちあるきの考古学 <http://www.koutaro.name/index.html>
- 3) 『大会研究発表論文 福山市鞆の浦における伝統的 石造港湾施設の調査研究』山田岳晴 民俗建築135号 日本民俗建築学会 2009.05
- 4) 『鞆港の港湾史蹟』渡辺具能、脇本修自 港湾59号 日本港湾協会 1982.12
- 5) 『図説福山・府中の歴史（広島県の歴史シリーズ）』土井作治監修、上田靖士ほか 2001年 郷土出版社
- 6) 『鞆の浦の自然と歴史 改定4版』福山市鞆の浦歴史民俗資料館友の会 2008年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会
- 7) 『絵図と歴史資料で観る江戸期の鞆の津：二〇一八（平成三十）年特別展』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 2018年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館
- 8) 『鞆の町並と商家の賑わい：シーボルトも称賛：特別展鞆まるごと博物館』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 2007年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館活動推進協議会
- 9) 『こども向けパンフレット 特別展 鞆幕府將軍足利義昭～瀬戸内・海城・水軍』 2020年 福山市鞆の浦歴史民俗資料館

<取材協力・資料提供>

- 1) 福山市鞆の浦歴史民俗資料館

<図・写真提供>

- P42上、写真1、写真5 高見元久
写真2、4 本田悠稀実
写真3 松田明浩
図1 パンフレット『～潮待ちの館～福山市鞆の浦歴史民俗資料館』を参考に著者作成
図2 福山市鞆の浦歴史民俗資料館